

## 《字の研究》

著者	青木 木菟哉
著者別名	AOKI Tsuguya
雑誌名	漢文學會々報
巻	22
ページ	12-18
発行年	1963-05-25
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00148545">http://doi.org/10.15068/00148545</a>

# 『』字の研究

青木木菴哉

- 一、序 二、漢碑『字舉例 三、字形考 四、字義考
- 五、字音考 六、説文から見た『と坤 七、結論

## 一、序

馬衡氏の遺著である「漢石經集存」に収録されている周易斷碑を検討すると、標題のごとき文字を發見するのであるが、なお、この文字は隸釋卷四に見える司隸校尉楊孟文石門頌など廣く漢碑の上に散見している。この一連の文字が現行本の周易坤卦の名稱にあたる古字であることは、石經斷碑の出現によって決定的になつたといえるのである。ところでこの文字は如何なる性格をもつものであるうか。その形・音・義などについて考察することにする。

## 二、漢碑『字舉例

漢碑に散見する『字の用法には、乾『・『靈・『兌などのように熟して用いられているものが多いが、左にその使用例を指摘してみる。

- 1、『靈定位 司隸校尉楊孟文石門頌・隸釋卷四、建和二年(一四八)
- 2、下答『皇 同右
- 3、乾剛『靈 張公神碑・隸釋卷三、和平元年(一五〇)

- 4、乾『 同右
- 5、辟世乾『 涿三彩楊信碑・隸釋卷十八、和平元年(一五〇)
- 6、則象乾『 百石孔餘碑・隸釋卷一、永興元年(一五三)
- 7、失明哲兮入『 益州大守無名碑・隸釋卷十七、永壽元年(一五五)
- 8、受象乾『 韓勅修孔廟後碑・隸釋卷一、永壽三年(一五七)
- 9、乾『垂極 蜀郡臨國李季二君造橋碑・隸釋卷十五、延壽七年(一六四)
- 10、乾『定位 西嶽華山廟碑・隸釋卷二、延壽八年(一六五)
- 11、乾『見微 雍州碑・隸釋卷一、永康元年(一六七)
- 12、威肅剝『 衛尉衡方碑・隸釋卷八、(一六八)
- 13、乾『所挺 魯相史晨祠孔廟奏銘・隸釋卷一、建寧二年(一九九)
- 14、乾『蓋載 故民吳仲山碑・隸釋卷九、嘉平元年(二〇二)
- 15、乾『之象 成・靈長碑・隸釋卷一、建寧五年(二〇七)
- 16、『兌之開 折皇橋都閣頌・隸釋卷四、建寧五年(二〇七)
- 17、乾『剖分 建寧太守高敞勳銘・隸釋卷四、建寧三年(二〇四)
- 18、古『元 袁平石渠局易・漢石經集存、熹平四年(一七五)
- 19、乾以君之『以藏之 同右
- 20、致役乎『 同右

21、ㄩ 同右

22、ㄩ 靈既定

樊毅修華嶽碑・魏碑卷二、  
光和二年(一七九)

23、建立乾ㄩ

三公山碑・魏碑卷二、  
光和四年(一八一)

24、ㄩ 爲物母

同 右

25、乾 ㄩ

巴郡太守張納碑・魏碑卷五、  
中平五年(一八八)

26、寔惟乾ㄩ

劉熊碑・魏碑卷五、  
無年月

右の諸碑に見られるㄩ字の實際の筆勢は、漢石經集存の拓本や寰宇貞石圖に收録されている原碑の影印、その他金石粹編、隸辨などによつてうかがうことができるが、隸釋や漢隸字源の字體は既に偽體が多く、本來の面目を知るには餘り適當とはいえない。

(注) 舉例中の字體は碑によつてそれぞれ筆勢に差異があるが、ここでは印刷の關係ですべて一概に統一した。實態については前掲、漢石經集存・寰宇貞石圖・金石粹編・隸辨・魏碑などを参照された。

### 三、字形考

漢碑所見の字體が坤の字に當ることについて、宋の洪适は隸釋の中で、

乾川與潁川相類。雖家語有乾川、猶天淵也。然隸書未嘗有坤字。此乃乾坤爾。(堯廟碑)

と述べている。なお、玉篇や經典釋文などの記載はいずれもみなㄩの字が坤に當るものであることを示しているのである。坤の字は漢碑の隸書ではすでに例示したㄩの字體を用いているだけで、不思議にも今日用いている坤の字體を

發見することができない。この現象は隸釋や隸續、金石粹編・寰宇貞石圖などに載っている漢碑を始めとして一つの例外もなく、おそらく漢代における用字の特色になつてゐるものと考えられる。ところで、漢碑の字形が何に由来するかについて諸説を整理すると、六經正誤・六書略・康熙字典などが坤の卦の形を象つたとする説と說文字通・經義述聞・張行孚の釋ㄩなどのごとく、この字形は河川の川の字に基づくものとする説の二つに大別することができる。私はこのうち後者の説がよいのではないかと思うのであるが、古籀篇の説を除いてはみな十分な確證をもたない恨みがある。そこで私は川の字の諸形體を甲骨文(後上・十一・一、後上・十四・一など)、金石文(大矛・奇觚、鐘布品川・奇觚、臨川司馬之璽・古籀篇、漢開母廟石闕銘・朝陽閣・郭泰碑・金石粹編など)、長沙繪書(大陸雜誌十・六、書道全集一)などについて收集し検討した結果、漢碑の字體は確として川の字であることを確認するものである。

川の字の最も古い形は、甲骨文(前四・十三・二、前八・十二・四、後下二十四・十一、後下二十四・十六など)によつて明らかのように、兩岸の間をぬつて流れる水を象つた象形文字であり、これらの中には具體的に水滴を書きしるしたものや、その水滴が略されて線に變化したものがあつて、また縦書き、横書きなどがあつて、極めて自由な書法を示しているのである。これらの川の字を漢碑の字體と比

較すると兩者の間には密接な關連が見出される。

例へば、堯廟碑のㄩは同じ碑に用いられている地名としての潁川の川と酷似していることは、隸釋がすでに指摘した通りであり、また石經周易に見える字體は郭泰碑（金石粹編）の百川の川と類似して區別しにくい體をなしている。玉篇が川の字に注して、「注瀆曰川也。古爲坤字也。」と述べていることは、川の字がかつて坤の字として用いられた事實のあることを物語っているものであり、時代は下つて玄宗の開元二十六年の寫本である敦煌本經典釋文の注記に散見するㄩの字體は川に作つており、唐の泉君墓志に見られる川の字と酷似しているのである。これらの關係から考察すると、漢碑の字體はすなわち川の古形に基づいていることが明らかにになるのである。古泉匯に収録されている古錢幣や品川新の銘刻に見える川の字がかつて坤と讀まれていることは注目すべきであり、漢碑ㄩ字の由來を裏付けするものと思われるのである。

#### 四、字義考

漢碑のㄩの字が字形上から考察して河川の川の字に由來するならば、その川の字義は如何。現在、易の卦名として用いられている坤の字との間にその字義上の關連が成立するものであるうか。考究の結果によれば、川には元來從順という場合の順の意味があつて、それが易の坤の卦の表わす意味に通じるのである。川については説文に、

川、母穿通流水也。虞書曰、濱くㄩ岨ㄩ。言深くく之水、會爲川也。（段注説文）

と述べ、許慎は運河のごときものを考えているのであるが川の本義は甲骨文に徴すれば判るようになり、堤防の間を傾斜にそつて流れる水をさすことは明らかである。水が川に注げば流通して滞ることなく流れることから、引申して、川には次第に順の意味が生じてくることは、例えば章炳麟の文始に、

説文、川、貫穿通流水也。川又孛乳爲順理也。

といい、段玉裁は説文に注して、「川之流、順之至也。」といい、康熙字典には、「順、川流也。」と述べていることなどによつても判るが、また、川を音符として構成されている馴・訓綏などの字にはいずれも順の意味が付與されているのである。

また、國語（卷十）晋語（四）の「車上水下。必伯。」と述べているその韋昭の注に、「水坎也。……水動而下順也。」といつているのも川が順の意味をもつて示すものである。坎は易では水であり、また、川を意味することは、易中孚の「利涉大川。」の虞翻の注に「坎爲大川」とあり、渙卦の「利涉大川。」の程頤の傳に「坎水。大川也。」とあることによつて判るのである。

ところで、川のもつている順の意味が易の坤の卦の表わす意味に結びつくというのは、易の説卦に「坤順也。」とあ

るから、この解釋によると坤の卦には從順の特性が附與されておき、したがって川の性質に密接に連なるものと考えられる。釋名に「坤順也。」(釋地)とあり、國語(卷十)の「車班外内、順以訓之。」(晉語四)の韋昭の注にも「坤順也。」とあつて説卦と同じであり、特に廣雅釋詁の「川順也。」の「川」の字は、川の篆文體を楷書的筆法で寫定した形に作られている。これは川と坤とが順という共通の意味を介してたがいに通じあつてゐることを最もよく示している證左である。

なお、傍證を求めるならば易の卦の坎と坤とは等しく衆の意味をもつてゐる。國語(卷十)の「坎勞也。水也。衆也。」(晉語四)の韋昭の注に「易以坤爲衆。坎爲水。水亦衆之類。」といひ、一方、易の説卦には「坤爲衆。」とあり、左傳閔公二年の「衆歸之。」の杜預の注に「坤爲衆也。」といつてゐることは、いづれも皆、坎すなわち川(水)と坤との共通性を物語るものである。

### 五、字音考

古韻では川と坤とは音が近づいており、たがいに通じて用いられたものと思われる。この二者通用の關係は川と坤とがともに從順の順と音が近似していたことによつて判るのである。

最初に川と順との關係を考察すると、林義光の文源に「川文韻音順(川字下)といひ、また、「順川聲(順字下)といひ、

つてゐる。ところで順の字の構造を考えてみると、これには會意(大徐本・段注說文・說文義證など)と形聲(小徐本・繫傳校錄・段注徐箋・說文句讀など)、會意兼形聲(說文通訓定聲)などの諸説があるが、形聲文字とみるのが妥當である。順がその構造上、形聲文字であるということになれば、「從頁川聲」となり、川がこの字の音符を示すことになるから、川と順とはその音が通じ得るということになるのである。諧聲補逸にも、

順川聲。凡巡訓馴朝紉等字皆從川聲。不得于順字云會意。川與順聲相近。

といひ、段玉裁の六書音均表によれば、川も順ともに古韻十三部に屬していることによつても、このことは明らかになるのである。

次に坤と順との音韻關係について考えてみると、この兩字も古韻では音が近かつた。坤の構造には會意(大徐本・小徐本・段注說文・說文義證など)と形聲(說文通訓定聲・說文句讀・說文釋例など)の二説があるが、これも形聲文字とみる方が妥當である。說文では、呻・伸・陳・電などはいずれも「申聲」に從つてゐるから、この例からすれば坤も形聲とみるべきであらう。坤を形聲とすれば、その構造は「從土申聲」となり、申は音符となり古韻十二部に屬するのである。

ところで坤と順とが音が近いというのは、易の説卦に「乾

健也。坤順也。」と訓じているが、この乾と健、坤と順とはそれぞれ疊韻關係にあり、疊韻の文字は音も近く義もまたたがいに通じるといふ特性がある。劉師培の中國文字學にはその音韻面に言及して、

周易乾健也。坤順也。坎陷也。離麗也。皆以上古之時僅有乾坤坎離四字、兼含健順陷麗之義。後世則健順陷麗四字最爲通行。而乾坤坎離知者漸鮮。周易此文所以明乾坤坎離四字、猶之近世健順陷麗四字也。然健順陷麗之音、又與乾坤坎離之音相近。此因古今語言不同、而分爲二字者也。(轉注釋例)

といふ、また、疊韻文字については、

疊韻文字、義必相近。故二字即可互訓。例如乾健也。坤順也。坎陷也。離麗也。(疊韻釋例)

と述べているのは卓見である。周易釋故(眞勢中州・松井羅州)の坤の卦に「坤は食閏の切、去音順、順がふなり、説卦に、坤は順なりと云、これ音と義と俱に併せ釋し玉へるなり。」といふ、坤の反切は「食閏切」になつてゐるが、段注の順は「食閏切」と通じてゐるのである。六書音均表では坤は古韻十二部に屬して、十三部の川・順と極めて接近してゐるので、その結果川と坤とは傍轉作用によつてたがいに通じ得たと考えられるのである。

#### 六、説文から見たㄩと坤

説文は坤字を易の卦名として取扱つてゐるが、ㄩ字につ

いては指摘せず、何等注解を施していない。従つて説文にはㄩ字が載つていないといふ説があるのである。これには王筠(説文句讀)・惠棟(惠氏讀説文記)・席世昌(席氏讀説文記)・阮元(左傳校勘記)などがあるが、例えば王筠は、

易釋文、坤本又作ㄩ、ㄩ今字也。案漢碑ㄩ字屢見。蓋隸書也。故説文不收。(説文句讀)

と述べてゐる。惠棟や席世昌は「闕如」説をとり、阮元はただ「説文無」といつてゐるのであるが、これはいかがであらうか。

漢碑の字體は直接的には川の篆文體を隸書的筆法によつて書き改めたものと考えられるのであり、漢碑では乾坤も山川も同一字を用ゐるのである。ただこの場合、前者と後者との混同を避けるために、兩者の筆勢に變化をもたせ、ㄩ・川の二體に作つて區別をするという工夫があつたのではないかと思われる。

漢隸のㄩの字體は實は説文の解説の中に存在してゐる。一つは川字下の虞書(前出)に見え、一つは首字下(首首。同古文首也。ㄩ象髮。謂之鬚。鬚卽ㄩ也。)に髮の形を象つたものとして出てゐる。説文の解説は本來隸書を用ゐてゐるから、これらの字體は恐らく漢碑のように書かれていたはずであるが、今本の説文は楷書化して筆勢に變化をきたしてゐるのである。従つてㄩ字は現在の説文には篆文(川字)と隸書の楷書化された形とにおいて解説の中におの

ずから存在しているのであるが、ただ説文は古文・籀文・篆文の字書であるから、隸書の筆法によるㄩの字體を正文として許慎が収録していないのは、もとより當然のことといわねばならない。

ところで篆文の川字が漢隸のㄩ字の原據になるならば、説文が坤の字の下に特に「易之卦也。」と注しながら、川字には何等の注解を施していないことが疑問になる。しかし八卦の乾・兌・離・震・巽・坎・艮などについてもみな「易の卦」を注していないから、ひとり川字だけのケースではない。また、八卦の意味についても説文の解説は必ずしも易に連なるとは限らない。熹平石經周易に見える八卦中の七文字を説文と釋文の解説に照してみると、

乾 (説文) 上出也。

(釋文) 説卦云、乾健也。此八純卦。象天。

兌 (説文) 説也。

(敦・釋文) 悅也。八純卦。象澤。

離 (説文) 黃倉庚也。鳴則蠶生。

(敦・釋文) 麗也。麗著也。八純卦。象火。

震 (説文) 劈歷振物著。

(敦・釋文) 動也。八純卦。象雷。

巽 (説文) 具也。

(敦・釋文) 入也。廣雅云、順也。八純卦。象風象木。

〔備考〕石經・現行本周易・經典釋文はみな巽に作り、説文は「巽下に」易の

飲 (説文) 欲得也。

(敦・釋文) 坎、又作埒。京劉作飲。險也。八純卦。象

水。

〔備考〕石經はすべて飲に作り、現行本周易・經典釋文はみな坎に作る。坎は説文に險也。」とある。釋文一本は埒に作る。

このような解説の實態から説文が川字下に「易の卦」とか「順」の意味を述べていなくとも敢えて差支えない。また、卦名は一卦一字とは限らない。卦名は本来假借字的性格のものであるから、普通作用や師傳によつて異同が生じる。巽と巽、飲と坎と埒などの例もあるから、坤卦に二字存在することも可能である。説文では坤字以外に他の一例として巽字に「易の卦」を注している。(巽巽也。此易巽卦。爲長女。爲風者。)この二字は段玉裁が坤字に注しているように、易のために特に造つた文字というようなものではなく、當時祕府に藏されていた稀存の孟氏古本易にはこの字體を用いたものがあつたのであろう。篆文體の坤・巽は漢代の一般通行文字としての隸書には用いられておらず、すでに古字化された性格の文字であつたがために説文は「易の卦」を特記したものと考えられる。

坤の本義はすでに述べたように順の意味を表わすものと考えられるが、説文が「坤地也。」といつているのは、易の「説卦に」坤也者地也。「坤地也。」とあることなどによつたものであろう。また、左傳莊公二十二年および國語(卷十)

晋語(四)には「坤土也。」といつてゐるが、これらの解説はいずれも、釋文が「坤象地。」と述べてゐる通りに坤の卦の象を説くものであり、その意味としては説卦の「乾健也。坤順也云云」の正義に「此一節説八卦名訓。」といつてゐるのがよいと思われる。ところで坤字は甲骨文や先秦の金石文にはまだ見當らない。古る補・古籀補々・書道全集などが古鉢文に見える「從立從申」の文字を坤字と解釋しているが、この一連の文字は高田忠周が古籀篇において指摘しているように、「伸」字の異文であつて坤字そのものではないと考えられる。従つて今本の左傳や國語に見える坤字が果して先秦の用字であるかは極めて疑問である。左傳昭公二十九年の坤卦の釋文に「坤、本又作𠄎。」とあることなどから考合すると、坤字は戰國時代に秦の地を中心に行なわれた西方系の用字であり、𠄎字は殷周代に東方地域に行なわれた東方系の用字であつたらうと推定されるが、どちらかといへば坤は𠄎よりあとに作られた文字であり、漢代においては篆文は坤を用い、隸書は𠄎が一般通行化するやうになつたものと考えられる。

## 七、結 論

漢碑の隸書に見られる𠄎字は、その字形が暗示してゐるやうに、元來河川の川に基づくものである。また、その字義・字音についてみても、古代においては川と坤とはたがいに通じあう性格をもちながら使用されてゐたものであり

隸書において特に目立つた使用がなされてゐることは大きな特色といえるのである。漢碑の𠄎字は甲骨文に溯つて考へることができ、易の☷の形象と深い關係があるとともにまた、易の卦名の本字であつたかと思われる。しかしして、説文が特に指摘してゐる坤字は、易傳流の間に用いられた假借字であり、かつ戰國時代における西方系の用字を留めてゐるものと解釋される。易は漢代では第一位に重んぜられた經典であり、𠄎字系統の經本が學官に立つてからは、それが當時における一般通行の隸書となつて普及され、これに反して坤字は篆文用の文字としてだけ用いられたものと思われる。(開母廟石闕銘の篆文に「乾坤」の語が見える。) 𠄎と坤との兩字體がともに易の卦名として用いられるに至つた理由については、兩字の音義共通性によるものであるが、特に字形については、𠄎は河川の川とその字形が混同し易いために坤を借用したともみられ、後世いつしか𠄎の字體は廢れて用いられず、かえつて借字としての坤が通行化するやうになつたのであらう。漢碑所見の字體は漢以後唐にかけてなお用いられ(魏の孔羨碑、敦煌本經典釋文注記など)、これと併行して魏晉の頃から坤字も行なわれて隸書・楷書・行書などに散見し(孔子家語王肅注・王羲之玉篇など)、玄宗の開元改字頃から𠄎字は次第に廢れ坤字が專用されるやうになつたものと推察される。